一

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

昔、切支丹（キリシタン）が初めて日本に渡来したころ、(1)愛という語で非常に苦労したという話がある。あちらでは愛すは好むで、人を愛す、物を愛す、みな一様に好むという平凡な語が一つあるだけだ。ところが、日本の武士道では、不義はお家の御法度で、色恋というと、すぐ不義とくる。恋愛はよこしまなものにきめられていて、清純な意味が愛の一字にふくまれておらぬのである。切支丹は愛を説く。神の愛、*キリシトの愛、けれども、愛は不義につらなるニュアンスが強いのだから、この訳語に困惑したので、苦心のあげくに発明したのが、大切という言葉だ。すなわち「神（デウス）のご大切」「キリシトのご大切」と称し、余は汝（なんじ）を愛す、というのを、余は汝を大切に思うと訳したのである。

実際、今日われわれの日常の慣用においても、愛とか恋は何となく板につかない言葉の一つで、僕はあなたを愛します、などというと、舞台の上でウワの空にしゃべっているような、われわれの生活の地盤に密着しない空々しさが感じられる。愛す、というのは何となくキザだ。そこで、僕はあなたがすきだ、という。この方がホンモノらしい重量があるような気がするから、要するに英語のラヴと同じ結果になるようだが、しかし、日本語のすきだ、だけでは力不足の感があり、チョコレートなみにしかすきでないような物たりなさがあるから、しかたなしに、とてもすきなんだ、と力むことになる。

日本の言葉は明治以来、外来文化に合わせて間に合わせた言葉が多いせいか、言葉の意味と、それがわれわれの日常に慣用される言葉のイノチがまちまちであったり、同義語が多様でその各々に靄（もや）がかかっているような境界線の不明確な言葉が多い。(2)これを称して言葉の国というべきか、われわれの文化がそこから御利益を受けているか、私は大いに疑っている。

惚（ほ）れたというと下品になる、愛すというといくらか上品な気がする。下品な恋、上品な恋、あるいは実際いろいろの恋があるのだろうから、惚れた、愛した、こう使いわけて、たった一字の動詞で簡単明瞭に区別がついて、日本語は便利のようだが、しかし、私は(3)あべこべの不安を感じる。すなわち、たった一語の使いわけによって、いともあざやかに区別をつけてそれですましてしまうだけ、物自体の深い機微、独特な個性的な諸表象を見のがしてしまう。言葉にたよりすぎ、言葉にまかせす

ぎ、物自体に即して正確な表現を考え、つまりわれわれの言葉は物自体を知るための道具だという、考え方、観察の本質的な態度をおろそかにしてしまう。要するに、日本語の多様性は雰囲気的でありすぎ、したがって、日本人の心情訓練をも雰囲気的にしている。われわれの多様な言葉はこれをあやつるにはきわめて自在豊饒（ほうじょう）な心情的沃野を感じさせてたのもしい限りのようだが、実はわれわれはそのおかげで、わかったようなわからぬような、万事雰囲気ですまして卒業したような気持になっているだけの、原始詩人の言論の自由に恵まれすぎて、原始さながらのコトダマ*のさきはふ国に、文化の借り衣裳（いしょう）をしているようなものだ。

人は恋愛というものに、特別雰囲気を空想しすぎているようだ。しかし、恋愛は、言葉でもなければ、雰囲気でもない。ただ、すきだ、ということの一つなのだろう。すきだ、という心情に無数の差があるかもしれぬ。その差の中に、すき、と、恋との分があるのかもしれないが、差は差であって、雰囲気ではないはずである。

恋愛というものは常に一時の幻影で、必ず亡（ほろ）び、さめるものだ、ということを知っている大人の心は不幸なものだ。

若い人たちは同じことを知っていても、情熱の現実の生命力がそれを知らないが、大人はそうではない、情熱自体が知っている。恋は幻だということを。

年齢には年齢の花や果実があるのだから、恋は幻にすぎないという事実については、若い人は、ただ、承った、ききおく、という程度でよろしいのだと私は思う。

ほんとうのことというものは、(4)ほんとうすぎるから、私はきらいだ。死ねば白骨になるという。死んでしまえばそれまでだという。こういうあたりまえすぎることは、無意味であるにすぎないものだ。

教訓には二つあって、先人がそのために失敗したから後人はそれをしてはならぬ、という意味のものと、先人はそのために失敗し後人も失敗するにきまっているが、さればといって、だからするなとはいえない性質のものと、二つである。

恋愛は後者に属するもので、所詮幻であり、永遠の恋などは嘘（うそ）の骨頂だとわかっていても、それをするな、といい得ない性

質のものである。それをしなければ人生自体がなくなるようなものなのだから。つまりは、人間は死ぬ、どうせ死ぬものなら早く死んでしまえということが成り立たないのと同じだ。

私はいったいに万葉集、古今集の恋歌などを、真情が素朴純粋に吐露されているというので、高度の文学のようにいう人々、そういう素朴な思想が嫌いである。

極端にいえば、あのような恋歌は、動物の本能の叫び、犬や猫がその愛情によって吠(ほ)え鳴くことと同断で、それが言葉によって表現されているだけのことではないか。

恋をすれば、夜もねむれなくなる。別れたあとは死ぬほど苦しい。手紙を書かずにはいられない。その手紙がどんなにうまく書かれたにしても、猫の鳴き声と所詮は同じことなので、以上の恋愛の相は万代不易の真実であるが、真実すぎるから特にいうべき必要はないので、恋をすれば誰でもそうなる。きまりきったことだから、勝手にそうするがいいだけの話だ。

初恋だけがそうなのではなく、何度目の恋でも、恋は常にそういうもので、得恋は失恋と同じこと、眠れなかったり、死ぬほど切なく不安であったりするものだ。そんなことは純情でもなんでもない、一、二年のうちには、また、別の人にそうなるのだから。

(5) 私たちが、恋愛について、考えたり小説を書いたりする意味は、こういう原始的な(不変な)心情のあたりまえの姿をつきとめようなどということではない。

人間の生活というものは、めいめいが建設すべきものなのである。めいめいが自分の人生を一生を建設すべきものなので、そういう努力の歴史的な足跡が、文化というものを育てあげてきた。恋愛とても同じことで、本能の世界から、文化の世界へひきだし、めいめいの手によってこれを作ろうとするところから、問題がはじまるのである。

A君とB子が恋をした。二人は各々ねむられぬ。別れたあとでは死ぬほど苦しい。手紙を書く、泣きぬれる。そこまでは、二人の親もそのまた先祖も、孫も子孫も変わりがないから、文句はいらぬ。しかし、これほど恋しあう御両人も、二、三年後には御多分にもれず、つかみあいの喧嘩(けんか)もやるし、別の面影を胸に宿したりするのである。何かよい方法はないものかと考え

る。

しかし、大概そこまでは考えない。そしてA君とB子は結婚する。はたして、例外なく倦怠(けんたい)し、仇心(あだしごころ)も起きてくる。そこで、どうすべきかと考える。

その解答を私にだせといっても、無理だ。私は知らない。私自身が、私自身だけの解答を探しつづけているにすぎないのだから。

（坂口安吾「恋愛論」〈一九四七年〉より。一部省略）

注（＊）

キリシト＝キリスト。

コトダマのさきはふ国＝ことばに宿る霊妙な力により幸福がもたらされる国。古代より日本を美化する表現として用いられた。

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)は筆者のどういう考えを示すのか、説明せよ。

問三　傍線部(3)の「不安」とはどういうものか、説明せよ。

問四　傍線部(4)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問五　傍線部(5)について、筆者はどのように考えているか、説明せよ。

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

*碧梧桐の「俳諧漫話」の中に「木の実植う」といふ題についての感じの相違が論じてある。即ち「木の実植う」といふ事について*鳴雪翁と余とは空想的（碧梧桐の用語に従うて置く。写生に対しては空想といふよりも理想といふ方が適切な用語かも知れぬが）の趣味に重きを置き、碧梧桐は写生的の趣味に重きを置き、句の選択の上に意見の衝突を来したといふ事につき、碧梧桐は余等の空想趣味を幼稚なるものとし、碧梧桐の写生趣味を進歩せるものとして居るやうである。ここにはその答弁かたがた、写生趣味と空想趣味について多少の分*解を試みて見ようと思ふ。

かつて子*規子と二人道灌山（だうくわんやま）の茶店に休んで居（を）つた時である。だんだん夕暮になつて来て、茶店の下の崖には夕顔の花がしろじろと咲き始めた。その時子規子の説に、「夕顔の花といふものの感じは今までは源*氏その他から来て居る歴史的の感じのみであつて俳句を作る場合にも空想的の句のみを作つて居つた。今親しくこの夕顔の花を見ると以前の空想的の感じは全く消え去りて新しい写生的の趣味が独り頭を支配するやうになる。」と。余もまた子規子とともに同じく夕顔の花を目前に眺めて居り、その写生的の趣味が頭を支配するやうになるといふ子規子の心持もよく了解せられてゐたのであるが、(1)「以前の空想的の感じが全く消え去る」といふ事については少なからず不安の念と不平の情とを禁じ得なかつた。そこで余は大いに子規子に反対せずには居られなかつた。それは、夕顔の花そのものに対する空想的の感じを一掃し去るといふ事は、せつかく古人がこの花に対して附与してくれた種々の趣味ある連想を破却するもので、たとへて見ると名所旧蹟等から空想的の感じを除き去るのと同じやうなものである。名所旧蹟は一半の美はその山水即ち写生的趣味の上に在るが、一半の美は歴史的連想即ち空想的趣味の上に在る。「夕顔の花」も同じ事で、一半の美はその花の形状等目前に見る写生趣味の上にあるのであるが、一半の美は源氏以来の歴史的連想即ち空想的趣味の上にある。しかるに全く空想的趣味を除き去るといふ事は花の一半の美を殺（そ）ぎ去るもので、また名所旧蹟から歴史的連想を除去するのと何の異なるところも無い、といふやうな事を繰りかへして論じた。しかし子規子の*決論は斯（か）うであつた。「それは仕方が無い。写生趣味の上に立脚する以上は自然の結果として空想趣味を排斥せねばな

らぬやうになる。一方でははなはだ殺風景な感じがするが、その代り一方ではまだ古人の知らぬ新しい趣味を見出す事が出来るではないか。」しかし当時余はこの論に何処までも不平であつた。

空想趣味とは何であるか。たとへば春雨なる句を作る場合に、ただ単に目前にしよぼしよぼ降りつつある雨そのもののみを見た時には吾人はその裡に幾何の詩趣を見出し得るであらうか。殺風景なる道路の泥濘、泥中の落花、ただ斯くの如きのみである。しかしながら一旦古人の詩歌、事蹟、その他種々の連想を有意識もしくは無意識のうちに想起するに至つて始めて春雨の濃艶な趣味を了得するやうになる。これは取りも直さず一種の空想趣味である。

春雨やもの語り行く蓑と傘　蕪村

春雨や蓑の下なる恋衣　几董

春雨や猫に踊を教へる子　一茶

これらはいづれも写生趣味の句といつてよい。几董の句のやや主観的な外は全く客観の事実をありのままに写したものである。しかしながらこれらの事実を案じ出す事、言を換ふれば、目前に在る数限り無き事実のうちより特にこれらの事実を探り出す事は作者の脳中に醸し成された空想趣味の働きではあるまいか。春雨の降りつつある中に起こる出来事は幾千万とも数へ切れぬ程ある。その中でこれは春雨に配合するのに調和がよい、これは悪い、と区別を附け得るのは空想趣味の判断ではあるまいか。もし写生すれば善いといふ事になつてしまへば、春雨の降りつつある中に見る処のものであればすべて春雨の趣味あるものとしなければならぬ事になる。また写生趣味に重きを置くものからいふととかく左様になりたがる傾きがある。しかし(2)これはむしろその弊といつてもよからうと思ふ。空想趣味は一方に力足をふんばつてなかなか容易には関門を通過させぬ。これも春雨の趣味が無い、それも春雨の趣味が無い、それも駄目、これも駄目と。斯くして幾百千の事実のうちからわづかに一二の事実のみを特に春雨らしき材料として認めるばかりである。この空想趣味なるものは、作者が親しく春雨そのものより得来るところもあるが、しかも多くは(3)我等の祖先より漸次踏襲して来た、言を換ふれば古人が一握りづつの土を運んで築き上げてくれた趣味で、我等がアダム、イヴの如くこの土に降下してただちに感得し得る趣味ではない。物理学化学なるものの智識

が多くの年所を経て今日の如き発達を為したのと同じ事で、春雨なる一の天然物に対する人間の情感も幾多の歳月を閲して今日の如き趣味にまで開発されたのである。故にもし赤裸々たる春雨そのものを捕へて見たら、決して空想的趣味によつて空想的に性質づけられて居る如き濃艶なものでは無いかも知れぬのである。

写生趣味とは何であるか。空想趣味のややもすると陳腐に陥る嫌ひがあるので、新しい方面を開拓しようとするところのものである。古人が一握りづつの土を運んで築き上げてくれた趣味の上にさらに一握りの土を加へようとするところのものである。試みに我等がアダム、イヴの如くはじめてこの土に降下したものとして、ただちに自然より春雨の趣味を感得せんとするところのものである。およそ文学美術の萎微*はすべて古人の思想形式を踏襲し模倣するところから起こる。およそ文学美術の興隆はすべて古人の思想形式を打破し刷新するところから起こる。これは明々白々の理で、我が新派俳句が蹶起*して立つたのも必竟*するにこの打破刷新の功を奏せんためであつた。しかしこの打破刷新なるものは始めはその勢はなはだ猛烈でややともすれば玉石ともに焚くの恐れがある。(4)写生趣味が一切の空想趣味を打破し去つて別に一天地を創造しようとするのは半ば功を貽して半ば害を貽す。功はその目的を達して斬新なる境地を開拓するところに在る。害は古人がせつかく一握りづつの土を運んで築き上げた趣味を傷つくるところに在る。しかれどもまたその打破刷新も歳月を閲するに従つて漸くにその鋒鋩*を鈍くして玉はこれを拾ひ石はこれを焚くだけの識別が出来るやうになる。丘上に立つて来路を顧みると、かつて馬蹄に一蹶*し去つた、かの一握りづつの土によつて築き上げられた空想趣味も、また必ずしも棄つべきもので無くて、(5)その一半の功を収めたりとして居つた一境地開拓も、必竟その空想趣味の上にさらに一握りの土を加へたのに過ぎぬ事を知るに至る。

（高浜虚子「写生趣味と空想趣味」より。一部省略）

注（＊）

碧梧桐＝河東碧梧桐（一八七三～一九三七）。正岡子規に俳句を学び、新傾向俳句を唱えた。

鳴雪翁＝内藤鳴雪（一八四七～一九二六）。子規派の長老と目された俳人。
分解＝詳しい説明。
子規子＝子規先生。筆者は正岡子規に俳句を学んだ。
源氏＝『源氏物語』。その巻名に「夕顔」がある。
決論＝論断。
吾人＝我々。
了得する＝悟る。
萎微＝衰退。
蹶起＝かたい意志をもって行動を起こすこと。
必竟するに＝結局のところ。
鋒鋩＝刃物などの切っ先。
一蹶し去つた＝一息にはねつけた。

問一　傍線部(1)のように筆者が感じたのはなぜか、「夕顔」に即して説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(3)はどういうことか、「春雨」を例にして説明せよ。

問四　傍線部(4)はどういうことか、説明せよ。

問五　傍線部(5)はどういうことか、説明せよ。

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

そのころ、ならの式部卿のみこと聞こえさせ給へるは、先帝の御弟みこにて、今の内の上の御をぢにてぞおはしましける。当代御位の折、坊にもゐさせ給ふべかりしを、あやしういはけなくおはしますころより御物の怪になやみ給ひて、常にあつしうのみおはしましければ、その才はかけ離れ給ひぬるに、いとくちをしき御宿世なりけり。この御母御息所も世をはやうし給ひ、また御はらからやうの人もおはせざりければ、はかばかしう宮の御後見聞こゆる人もなく、ただはかなう御覧じける。

同じころ、吉野の奥にいと尊き阿闍梨ありて、歳は八十ばかりに老いかがまりたれば、ふたたび世に出でじと誓ひつつこもりゐたるを、こよなう加持などしるくありと聞こえたれば、宮も忍びておはしまして、御加持参りこころみさせ給ふ。弥生はじめつ方の事なれば、(1)名にしおふ花の盛りゆかしう思して、多くはもよほされ給ふなりけり。阿闍梨はいみじき山のかひともてかしづき奉りて、真心に御加持参り、祈り奉りしけにや、二日三日おはします程に、御心地いとさはやかにぞおぼえ給うける。「今までかかる人おはすとも知らで過ぐしけるこそ、わりなけれ。年月むもれいたかりし心地の名残なう、例ざまにおぼゆるは、いと尊き事かな。仏の御しるしはこよなかりけるものを。まろもいにしへより本意遂げなんの心深かりしを、日ごろ病にのみ障へられてなん、(B)くちをしういたづらに世をば過ぐしぬるぞや。さるは、命長らへんためばかりに、頭下ろしなどするたぐひあれど、同じうはかひなきものから、(2)背くとならばかかる山にもこもり果てて、世をふたたび見ぬこそ、心もすみて、行ひも一筋にたのもしかりぬべけれ。今はかくてもあらまほしうおぼえて、世に帰るべき心こそせね。さは、やがて御弟子にならばや」など、よろづになつかしう語らはせ給へば、阿闍梨はいとどかしこまりて、尊き経文など説き聞かせ奉る。

寺々の入相、今日も暮れぬとおどろかすに、霞こめたる花の梢ども、雲も一つにかをりあひて、山風にかつ散りかかる気色は、時知らぬ吹雪かと見えまがふほど、たぐひなうをかしうながめさせ給へり。「とくとく、よそながら思ひおこせしは、も

のにもあらず」とのたまはせて、

よそながら聞きてしたひし面影は雲にも似ずよみ吉野の花

阿闍梨は「やや」とかたぶきて、やがて御返し奉る。

(3) み吉野の山のかひある春待ちて年へし花も色ぞ添ひぬる

（宮部万女『木草物語』より。一部省略）

注（＊）

坊＝皇太子。

阿闍梨＝徳の高い僧の尊称。

加持＝病気や災難を除くための修法。

山のかひ＝「山の峡（かひ）」（山と山との間）に、「かいがある」の意味を掛ける。

むもれいたかりし＝晴れ晴れとしなかった。

寺々の入相、今日も暮れぬとおどろかすに＝「入相」は「入相の鐘」の略で、日没時に寺でつき鳴らす鐘のこと。「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」（『拾遺和歌集』）による表現。

問一 波線部(A)(B)の「くちをし」について、それぞれ誰の、どのような気持ちをあらわしているか、説明せよ。

問二 傍線部(1)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

問三 傍線部(2)を現代語訳せよ。

問四　傍線部(3)の和歌は、阿闍梨のどのような気持ちをあらわしているか、説明せよ。

問題は、このページで終わりである。